



『上海博物館蔵戦国楚竹書研究(四)』「相邦之道」“合文・待時”字形考察

野原将揮

1.

本稿では『上海博物館蔵戦国楚竹書(四)』「相邦之道」第1号簡にみえる・字について考察する(以下『上博楚簡』)。まずは当該字が『上博楚簡』「相邦之道」で如何様に用いられているか見てみよう。

《本文》





……□先其欲、備其𠄎(強)、牧其𠄎(倦)、𠄎(静)巳寺(待)、𠄎(待時)出、

《訓読》

……□其の欲を先にし、其の強きを備え、其の倦たるを牧い、静にして以って待ち、時を待ちて出ず、

2.

字釋の通り・は前者が「寺」字、後者は「𠄎=」と作り「待」字と「時」字の合文とする。後者を「待・時」の合文とするのは『上博楚簡』の整理者である張光裕(2004)に依るものである。しかし、それ以上の事については言及されていないため、本稿では「待」「時」両字の合文について些か卑見を述べたい。

甲骨・金文が存在する漢字にとっては前者の字形が「寺」を表していることは一目瞭然である(注1)。また当該字が「待」の通假字であることも前後の文意からも妥当である。以下、「寺」字の通假事例を幾つか挙げよう。

【待】

- ・ 『穀梁傳・襄公二十九年』「寺人也。」「『經典釋文』「寺本又作侍。」
- ・ 『詩經・大雅・瞻卬』「匪教匪誨、是維婦寺。」「『毛傳』「寺、近也。」「『孔穎達疏』「寺即侍也、侍御者必近其傍、故以為近。」「『陳奐・詩毛氏傳疏』「寺、古文侍、傳云近者、言暱近也。」


注1.ちなみに説文では「廷也。有法度者也。从寸之聲。」とする。




[待]


- ・ 長沙馬王堆帛書『十大經・前道』「是故君子卑身以从道、知以之辯、強以行之、責道以并世、柔身以寺之時。」

その他に、「持」「痔」「司」等々ある。

※「寺」は説文にあるように「之聲」。「寺」を聲符とする「侍」「待」「持」「痔」は之部、「司」も同様に之部に属す。




後者の字形  は「寺」字と同形、或いは近似しているという印象を得るが、細部にわたって観察してみるとやはり異なっていることに気が付くであろう。整理者と同様に陳斯鵬(2005)も当該字が「待」「時」の合文であるし、次のように説明する。

“前者  は後者  とはその下部が異なっている。後者  の下部は‘又’を表しているのではなく、‘日’と‘又’の両部を含んでいる可能性が高い。それがはっきりと見えないのはただ欠損したに過ぎないのである。当該字は‘時’とするべきである。そしてこ









の字形はまさに『郭店楚簡』「性自命出」第 15 簡にある  ‘時’字と同じである。‘時 =’は張光裕氏に従い‘待時’と読む。”(陳斯鵬 2005)。

本稿でも同様に両氏に従う。合文の一方を為すのは「寺」字であることは妥当である(「寺」は「待」の通假)。では合文を為すもう一方の「時」字について見てみよう。「時」字は説文では以下のように解かれている。



説文「四時也。从日寺聲。市之切。𠄎 古文時从之日。」






ここで注意したいのは「𠄎」字である。「𠄎、古文の時の文字である」としている。「古文」、つまり東方系文字のことである。『包山楚簡』等を見ると確かに「𠄎」を用いていることが分かる(『包山楚簡』137 反に  とある)。 の下部が「日」と「又」が重なって表記されていることから、合文の文字はどうやら「𠄎」字であるようだ。上述したように、もう一方の文字は前後の文意からも「寺」字である。つまり  は「𠄎」「寺」の合文ということになる(「寺」は「待」の通假)。

3.

「𠄎」と「寺」の合文であるの下部には書き手の意図を強く感ぜずにはいられない。陳斯鵬(2005)は“『上博楚簡』は『郭店楚簡』「性自命出」第 15 簡にある‘時’字と同じであり、『上博楚簡』はただ欠損したに過ぎない”としている。このように陳氏は『上博楚簡』と『郭店楚簡』が同じ文字であると看做しているが、果たして単純に同じ字形と看做してよいのだろうか、また本当に「ただの欠損」だろうか。書き手が異なるから字形も異なる。当然のことと思う。しかし、それほど単純なことではないだろう。そこで注意しなければならないのは当該字が合文であるということである。つまり合文である以上、1字で2字の意味を持ち合わせていなければならないのである(つまり2字でひとつの意味を表す、例えば「孔子」などがよく現れる)。合文である以上、陳氏のように当該字を「時」字と同じ字形と看做すべきではないように思う。仮に当該字が『郭店楚簡』が如くと表記されていたならば、読み手は「待時」字の合文で読むことが困難になり得る。また重文符合と捉え「時時」と読みかねない。そういった点からも『上博楚簡』は‘ただの欠損’というよりはむしろ‘意図的な変化’と言えるのではないだろうか。そして、その変化はまさに何琳儀(1989)で言うところの簡略化・合文借用笔画に当たる。以下何琳儀(1989)参照、


“合文借用笔画，则是两个字之间的笔画共用。外在形式有异，内在实质相同……合文借用笔画，在战国文字中出现频率甚高。有时还在合文右下角加合文符号「=」。”(p. 211)。

(例) 上下 →  工師 → 

上記のように、戦国期において字形簡略化は頻繁に行われており、合文においても例外ではない。の場合には「日」の一部分と「又」の一部分が共有していることが分かる。その共有部分の表記法がと『郭店楚簡』では決定的に異なっている。『上博楚簡』を抄写した人物が読み手または自身にも分かり易いように、と表記した。結果として、『上博楚簡』の前者

「寺」字とも異った字形を、『郭店楚簡』の  「時」字とも異なった字形を為しているのではないだろうか。

4.

 の下部が「又」にも「日」にも近似しているという点が非常に興味深く思う。もちろん上述したように合文であるからこそ、このような表記になったと予想されるが、こういった点に実際当時の人々が楚簡を書いていた一端を窺い知ることが出来るような気がする。何かしら書き手の意図が窺える。そういった楚系文字のある種の“自然さ”が非常に興味深い。

《参考文献》

- 高 亨『古字通假會典』1989 齊魯出版社
何琳儀『戦国文字通論（訂補）』1989 中華書局
何琳儀『戦国古文字典』 1998 中華書局
李守奎『楚文字編』2003 華東師範大学出版社
王海根『古代漢語通假字大辞典』2006 福建人民出版社
張守中『包山楚簡文字編』1996 文物出版社
張守中『郭店楚簡文字編』2000 文物出版社
張光裕『上海博物館藏戰國楚竹書(四)』 馬承源篇 2004 上海古籍出版社

陳斯鵬『初讀上博竹書(四)文字小記』2005 簡帛研究網